

中村正直先生五十年忌

——我國幼稚園創設第一人者として先生を偲ぶ——

倉橋惣三

本年六月七日は中村正直先生の五十年忌に當る。明治文化の元勳としての敬宇中村正直先生の遺徳は、極めて廣き範圍に於て顯彰せらるべきである。しかも、われらは、我國幼稚園創設の第一人者としての先生の識見と功績とに對し、特に敬意を捧げざるを得ない。

明治八年七月七日の、我國に於ける幼稚園開設の第一建議は、時の文部大輔田中不二麿氏の名を以て伺ひ立てられてゐる。田中氏が當時の新人として、教育の最もよき理解者として、此の建議の實際の發案者であつたことに疑ひはないが、當時の事情を知るものゝ言によつて察すれば、中村正直先生も亦、少くも此の發案者の一人であつたらしい。而して、先生が我國で初めて幼稚園の開設せられた東京女子師範學校（今の東京女子高等師範學校）の攝理になられたのは、その年の十一月である。先生はこれより前、幕府留學生としてロンドンに學び、明治元年歸朝せられたのであつたが、廣く教育の制度を見て來られた中に、幼稚園のことも深い興味をもつて見て來られたのであらうことは、先生の識見にしても、殊

に先生の性格からも充分察せられることである。

先生は東京女子師範學校の校長として、第二代であるが、附屬幼稚園創設の任に當られたのは先生であり、従つて、我國の幼稚園長としては最初の人である。しかも、そのみでなく、開園早々の明治九年十一月十八日の日々新聞には、ドゥアイ氏幼稚園論の概旨の譯稿を、つゞいて同二十四日の同紙上には、フレール氏幼稚園論の概旨の譯稿を掲載させてゐられる。職務上の管理者だけでなく、幼稚園に對する、眞の理解者であつたことがうかゞはれる。先生をして、今日の我國の幼稚園の發達を知らしめば、如何によるべきとされることであらうか。たゞ、先生創設の幼稚園に重任を受けてゐる身として、その當らざるを恥づるに共に、先生の洪徳による御指導を益々祈つて已まない。

尙ほ私事に互るが、私の伯父の一人は若くして直接先生の眷顧、誘掖を受け、その徳化を幼き私に語り聞かせて呉れたものであつた。御縁を淺からずして、特に偲ぶところ深い。